

更級日記と文学史

上野 英二

『更級日記』は、「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」に、物語への憧憬の芽生えたことを語つて始まる。⁽¹⁾

東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、所々語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、

この冒頭の句は、『古今和歌六帖』所載の古歌、

東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな

を踏まえて書き起こされている。

作者、菅原孝標女は、寛弘五（一〇〇八）年出生。長和六（一〇一七）年、父孝標の上総介任官に従つて、その任国上総国へ下向、彼の地で成長した。「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる」と言う所以である。しかし、その生育の地、上総を言うのに、なぜ常陸を詠んだこの歌が踏まえられる必要があつたのであろうか。そもそも東海道は、『延喜式』においても『倭名類聚抄』においても、上総、下総、常陸の順に下る。したがつて、常陸を「東路の道の果て」とは言い得ても、上総をさらにその「奥つ方」とは言い難い。上総国を「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方」と言うのは不正確であるし、あえて上総をそう述べ立てなければならない理由も差し当つては見出せない。

これは一体どういう理由によるのであらう。

『更級日記』が、冒頭このような書き方をしたのは、作者孝標女が『源氏物語』宇治十帖のヒロイン、浮舟にあこがれていたことによると考えられている（石田貞吉「更級日記冒頭の句」、『国語と国文学』第四卷第七号）。

幼い頃から「光源氏のあるやう」、『源氏物語』にあこがれた孝標女は、

光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ

浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ

浮舟の女君のかかる所にやありけむ

などのように、その作中で浮舟への傾倒を繰り返し洩らしているが、その浮舟こそは、孝標女とちょうど同じよ

うに、幼い頃継父の任官にともない常陸に下り、そこで成長した人物なのであった。『更級日記』が冒頭で「東路の」の歌を踏まえ、常陸を匂わせた理由も恐らくそこにあった。孝標女は『更級日記』を「東路の道の果て」と書き出すことにおいて、自らを我が身と境遇を同じくする『源氏物語』の浮舟に重ね合わせるところがあったらしいのである。

果してこの冒頭は、『源氏物語』の記事に符節を合わせて書かれている（津本信博『更級日記の研究』）。

昔も、あやしかりける身にて、心のどかに、さやうのことすべきほどもなかりしかば、いささかをかしきさまならずも生ひ出でにけるかな

（手習）

『源氏物語』あこがれのヒロイン、浮舟の育った「東路の道の果て」、それを踏まえて自分の育った上総をあえてそれよりさらに「奥つ方」と言ったのは、生いたちを等しくした浮舟にあこがれを抱きつつも、その人生には及びもつかなかった自らを、卑下してのことであつたのであろう。

『更級日記』は開巻早々、『源氏物語』を始めとする物語へのあこがれを語っていたが、そのあこがれはこのように、劈頭書き出しの一句にすでに伏在していただのであった。

しかし、問題はむしろその先にある。それは、「東路の」という古歌を踏まえて冒頭を書き起すという、書き方自体の問題である。すでに述べた如く、『更級日記』の冒頭は、『源氏物語』浮舟の人生をも暗示し、きわめて示唆に富んでいる。このように効果的に古歌を活用することで書き始められた日記は、現在諸作を通じて、『更級日記』をその嚆矢と言つてよい。⁽²⁾ 日記作品の冒頭として、『更級日記』の冒頭はまことに印象的なものであつた。

しかし、一方眼を物語に転じるならば、古歌を踏まえて冒頭の綴られる例を見出すことは必ずしも難しくはない。

他ならぬ『源氏物語』、例えば東屋の巻。

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞き軽々しう、かたはらいたかるべきほどなれば、おぼし憚りて、御消息だにえ伝へさせ給はず。

浮舟をめぐる物語が本格的な展開を見せる東屋。その冒頭は、一度垣間見た浮舟に心動かされた薫の動静を記すところから始まる。「筑波山を分け見まほしき御心」とは、常陸国に育った浮舟に因むもの言いであるが、そこには、源重之の、

筑波山端山繁山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり

（『重之集』）

の歌が踏まえられていた。「筑波山」は、無論浮舟を暗示している。物語は古歌を下敷にした冒頭を持つことによって、物語の展開を予感させつつ、きわめて効果的に始まるのであった。

『更級日記』が、古歌を踏まえるところから始まるのは、『源氏物語』、浮舟との関連で言えば、特に例えば、この東屋の巻あたりに学んだことによるのではないか。

はしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人も交らず几帳の内にうち臥して引き出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ。昼は日暮らし、夜は目のさめたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどはそらに覚え浮ぶを、いみじきことに思ふに、

と、『源氏物語』に読み耽ったこの日記の作者が、強くあこがれる浮舟に、我が身を重ねて日記を綴ろうとするのであれば、その書き方自体も、『源氏物語』に倣うことは十分に考えられることである。

『更級日記』の文章は、きわめて文学的なものであったと理解しなければならない。それは、日記とは言い条、『更級日記』には、事実が事実のままに記されるのではない、ということにもなるであろう。必要があればいつでも、その事実、例えば『源氏物語』などに学んだ表現によって潤色を加えられることがあり得たということでもある。

場合によつては、それが事実の歪曲にまで及ぶことさえあったかも知れない。上総国を「東路の道の果て」と言いなすことなど、その最たるものであったと言えるであろう。

まして、物語の主人公を拉し来たつて、「東路の路の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」と自己を規定して始まる以上、その日記に描かれる事柄は、最早事実そのものではあるまい。そこに描かれる生涯は、その実人生よりはかなりの程度物語的な潤色を含むものものではなかったか。もしそうだとするならば、このことは『更級日記』を読む上で、銘記しておかねばならないことになるはずである。

一一

「おのづからなどはそらに覚え浮ぶ」という言葉に違わず『源氏物語』の筆致に似る箇所は、『更級日記』の随所に見出される。次の箇所などは、『源氏物語』の影の色濃いという点では、その典型かも知れない。

上達部殿上人などに対面する人は、定まりたるやうなれば、初々しき里人はありなしをだに知らるべきにもあらぬに、十月ついたち頃のいと暗き夜、不断経に声よき人々読むほどなりとて、そなた近き戸口に二人ばかり立ち出でて聞きつつ、寄り臥してあるに、参りたる人のあるを、「逃げ入りに局なる人々呼び上げなどせむも見苦し。さはれ、ただ折からこそ。かくてただ」と言ふいま一人のあれば、かたはらにて聞きゐるに、おとなしく静やかなるけはひにてもものなど言ふ、口惜しからざなり。「いま一人は」など問ひて、世の常のうちつけの懸想びてなども言ひなさず、世の中のあはれなることどもなど細やかに言ひ出でて、さすがにきびしう引き入り難いふしぶしありて、われも人も答へなどするを、「まだ知らぬ人のありける」などめづらしがりて、とみに立つべくもあらぬほど、星の光だに見えず暗きに、うち時雨つつ木の葉にかかる音のをかしきを、「なかなか艶にをかしき夜かな。月のくまなく明かからむもはしたなくまばゆかりぬべかり」。春秋のことなど言ひて、「時にしたがひ見ることに、琵琶の風香調ゆるるかに弾き鳴らしたる、いといみじく聞こゆるに、また秋になりて月いみじう明かきに、空は霧りわたりたれど、手にとるばかりさやかに澄みわたりたるに、風の音、虫の声、取り集めたるこちするに、箏の琴かき鳴らされたる、横笛の吹き澄まされたるは、なぞの春とおほゆかし。⁽³⁾ また、さかと思へば、冬の夜の空さへ冴えわたりいみじきに、雪の降り積もり光りあひたるに、⁽⁴⁾ 簾櫳のわななき出でたるは、春秋もみな忘れぬかし」と言ひつづけて、

女房として初めて出仕した作者が遭遇した、きわめて浪漫的な場面である。対座の源資通は、孝標女生涯唯一の恋人と目されているだけあって、二人の交渉を描くこの場面は作中随一の長篇、文章にも力が込められている。

『源氏物語』の影響が窺われるのは、例えば傍線の箇所。それぞれ、『源氏物語』の、

目馴れたる、うちつけのすきすきしさなどは、このましからぬ

(帚木)

世の中も定めなきに、やがて消え給ひなば、かひなくなん」とて、夜もすがらあはれなることどもを言ひつ

(若菜下)

世の常の懸想びてはあらずに、心深う物語のどやかに聞こえつつものし給へば、さるべき御いらへなど聞こえ給ふ。

(椎本)

月は入り方の空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、

(桐壺)

風の音、虫の声につけて、

(桐壺)

琴の声、風につきて遙かに聞こゆるに、所の様、人の御ほど、ものの音の心細さ取り集め、

(須磨)

などの影響が認められよう。まさしく孝標女にとって『源氏物語』は、折にふれて口をついて出るものであり、その耽読の程が偲ばれる。

しかし、このような、『更級日記』に見られる『源氏物語』の影響とは、孝標女の、「おのづからなどはそらに覚え浮ぶ」という『源氏物語』の耽読を、単に反映するだけのものなのであろうか。

例えば、後者「月いみじう明かきに」以下の発言は、元来、作者に相對する源資通のものであつて、必ずしも孝標女の『源氏物語』への傾倒に由来するものであると特定することは難しい。むしろ、後出する、同席の女房

の歌、

人はみな春に心を寄せつめりわれのみや見む秋の夜の月

が、同じく『源氏物語』の、

人はみな花に心を移すらむひとりぞまどふ春の夜の闇

(竹河)

の一首を利用して詠まれているらしいことから判断すれば、資通の言葉の中に『源氏物語』の影響が認められるのも、資通の物言い自体が、すでに『源氏物語』を借り用いたものであったと考えるべきものなのかも知れない。資通が『源氏物語』ふうの物言いをしたことによって、同座の女房も同じ『源氏物語』に基づく歌での応酬をするという場が開かれていったとも考えられる。

恐らく、資通は春秋の情趣を、『源氏物語』に現われるような典型的なあり方において、あげつらおうとしたのかも知れないし、あるいはまた、『源氏物語』を踏まえての嗜み深い会話を、しばし楽しもうとしたのかも知れない。

では、前者、そういう資通の様子を描く「世の常のうちつけの」以下に見られる『源氏物語』の影響とは、どう理解すべきものであろうか。

この箇所が、日記地の文である以上、少なくともそれが、孝標女の筆に由来するものであることは動かない。だが、それは、この日記の作者が『源氏物語』を耽読し、暗誦するほどであったことを、単に反映するだけのものではなかったであろう。

少なくとも、後続するやりとりが『源氏物語』ふうの表現で展開してゆくということを視野に入れるならば、

それを見込んでの導入として、ここでは『源氏物語』の表現が借り用いられたものであろうと考えられる。ここでは、『源氏物語』ふうの表現が、後続の叙述に合わせて、恐らく意図的に選択されているのだと見るべきであろう。

資通が実際どのように振舞ったのか、事実は差し当って問題ではない。『更級日記』としては、後に『源氏物語』を踏まえた会話が優雅に続くからには、それへ至る地の文にも、『源氏物語』の雰囲気が見合うべく揺曳していなければならなかった。なぜなら、『源氏物語』の世界を体現した会話が展開される場としては、『源氏物語』的な文章世界こそが、ふさわしかったからである。

しかし、表現とその表現内容とは別のものではない。表現される事柄とは、その表現以上のものでも以下のものでもない。したがって、ここでも、表現の可能性は他にあったにも拘らず、それを捨てて『源氏物語』ふうの表現を選択した以上、そこに描かれる事柄自体が『源氏物語』的な色調を多少なりとも帯びようになることは否定出来ない。ある事実を『源氏物語』の言葉で表現したとしたら、それはまったくの嘘ではないにしても、そこには否応なく事実の希望的な脚色、『源氏物語』的な理想化が交ることになったはずである。

『更級日記』は、事実を事実のままに記しているものではない、やはりない。それはしばしば、物語的に美化され、浪漫的に脚色されることのある日記なのであった。『更級日記』の描こうとした世界は、客観的な事実というよりは、むしろ事実より少し浪漫的な、『源氏物語』的な世界であつたらしい。

『更級日記』における『源氏物語』の影響とは、表現の皮相にのみかわるものではなかった。単なる文飾に留まるものでも、無論ない。

あるいは、『源氏物語』以降の多くの物語に見られる、『源氏物語』の影響とも、同列に論すべきものでもまたなかった。彼は物語、此は日記。『更級日記』に、物語である『源氏物語』の影響が強く認められること自体、『更級日記』の物語的な側面の、端的な現れであつたに違いない。

このような性格を持った日記として『更級日記』を改めて見直すならば、先の資通の言葉自体、どこまで事実をありのままに反映したもののか、疑わしくさえなってくる。恐らく彼も、内容的には同じようなことを言つたのであろうが、それがどこまで『源氏物語』を意識してのものであつたか。『更級日記』が作者晩年の執筆にかかるとあることを考えれば、その叙述がどれほど真を伝えたものか、むしろ疑つてかかるべきかも知れない。だが、それはいずれにしても『更級日記』のこの箇所が、『源氏物語』ふうに美化して書かれていることについては、『更級日記』の側には相応の理由があつたと思われる。

と言うのも、この箇所、「春秋のことなど言ひて」とあるように、作者等と資通との間に春秋比較の論が交され、その論議の優雅な様が記されるのであるが、その話題こそは『源氏物語』にも描かれた雅趣豊かな話題であつたからである。

『更級日記』には、

唐土などにも、昔より春秋の定めは、えしはべらざるなるを、

と記されているが、当の『源氏物語』には、

唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひはべるめり、大和言の葉には、秋のあはれを取り立てて思へる、
いづれも時々につけて見たまふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらぬ。
(薄雲)

と、光源氏と秋好中宮との間に春秋の論が交されたことが語られていた。

資通と孝標女等との間に交された、春秋の間答こそは、孝標女が生来あこがれ続けていた、念願の『源氏物語』の世界を、まさしく地で行くものであったのである。このような希有の体験に恵まれたとするならば、その日記における叙述が『源氏物語』ふうになめらかな色調でいくのは、むしろ当然ではなかったか。

まして、当の相手源資通は、作者が仄かなあこがれを抱いた人であり、その人との交情は、『更級日記』に見る限り、唯一のロマンティックな恋の経験であった。その人を相手に『源氏物語』にも描かれるような経験をもち得たとするならば、孝標女生涯の至福。その叙述が、詳細長大となり、『源氏物語』ふうなものになったのも、無理からぬことであろう。

資通を描くのに借り用いられた、「世の常の懸想びてはあらずに、心深う物語のどやかに聞こえつつものし給へば（椎本）」の一節は、「宇治の大将」薫の描写。まさに「浮舟の女君」の相手役であり、孝標女のあこがれの人を描く一節だった。あるいはこのときの孝標女は、資通と薫とを同一視していたのかも知れない。

そうでなくてさえ、春秋優劣の論とは、平安朝の貴族達に伝統的に好まれていた風雅であった。宮仕えしてそういう話題に参加し得ただけでも、それは田舎出の孝標女には十分心昂る経験であったに違いない。

遠く萬葉集、額田王「競憐春山萬花艶秋山千葉之彩」の長歌（卷一、一六）に溯るまでもなく、貫之の、

ある所に春秋いづれかまさると問はせ給ひけるに、詠みて奉りける

紀貫之

春秋に思ひ乱れて分きかねつ時につけつつ移る心は

（『拾遺和歌集』）

を始め、『拾遺和歌集』、『大甞院御集』他この話題に因む平安朝の和歌は数多く残されているし、『論春秋歌合』、

『宰相中将君達春秋歌合』等の存在は、この話題がいかに平安朝の人々の心を捉えていたかを物語る、有力な裏付けでもある。

このような背景を顧みるならば、資通と孝標女等との間に交された春秋の論が、単なる消閑の遊び以上の、文化史的な意義を担うものであったことが明確になって来る。平安朝における女房として、上級の貴族を相手にかかる話題を共有し得たことは、孝標女にとっては、あこがれの宮廷の文化伝統をその身に体現し得た、誇るべき瞬間でもあったのだ。

孝標女は、必ずしも心楽しめない宮仕えについて、

里びたるここちには、なかなか定まりたらむ里住みよりは、をかしきことをも見聞きて、心も慰みやせむと思ふをりをりありしを、いとはしたなく、悲しかるべきことにこそあべかめれ、と思へど、いかがせむ。

と、我が身の勤めをかこっていたが、そういう作者の眼前へ、紛う方無き「殿上人」が現れて、『源氏物語』ふうの、雅びやかな世界を現出させてくれたとしたら、『更級日記』の筆が幻惑されるのも致し方のなかったことも知れない。

日記とは言っても、『更級日記』は決して事実そのものの客観的な記録ではなかったのである。事実そのものと言うよりは、むしろ事実の、かくあるべき、あるべかりし姿の記録であったと言う方が、その本質には近いかも知れない。

三

うらうらとのどかなる宮にて、同じ心なる人三人ばかり物語などしてまかでまたの日、つれづれなるまゝに恋しう思ひ出でらるれば、(中略) 同じ心に、かやうに言ひ交し、世の中の憂きも辛きもをかしきも、かたみに言ひ語らふ人、筑前に下りてのち、月いみじう明かきに、かうやうなりし夜、宮に参り会ひては、つゆまどろまずながめ明かいしものを、恋しく思ひつつ寝入りにけり。宮に参り会ひて、うつつにありしやうにてありと見て、うちおどろきたれば、夢なりけり。月も山の端近うなりにけり。覚めざらましをと、いとどながめられて、

夢さめて寢覺の床の浮くばかり恋ひきと告げよ西へ行く月⁽⁵⁾

この箇所にも『源氏物語』の影響が認められる。傍線の箇所などは、恐らく『源氏物語』の次の一節に基づいて書かれている。

夕月夜のをかしきほどに出し立てさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、
(桐壺)
御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず明かしかねさせ給ふ。
(桐壺)

しかし、『更級日記』に影響を与えた作品は、『源氏物語』だけにとどまらない。『源氏物語』の作者の日記、『紫式部日記』もまた、恐らく『更級日記』に大きく影響した作品の一つであった。波線の部分などは、『紫式部日記』の次の一節などに基づくところがあったのではなからうか。

はかなき物語などにつけてうち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書き交し、少しけどほき便りどもを、たづねても言ひけるを、ただこれを様々にあへしらひ、そぞろごとにつれづれをば慰めつつ、(中略)大納言の君の、夜々は御前にいと近う臥し給ひつつ物語し給ひしけはひの恋しきもなほ世に従ひぬる心か。浮寝せし水の上のみ恋しくて鴨の上毛にさえぞおとらぬ

返し、

うち払ふ友なき頃の寢覚にはつがひし鴛鴦ぞ夜半に恋ひしき

親しい友人のあり方を綴るのに、『更級日記』は『紫式部日記』を殆ど手本にしている如くである。

従来、『紫式部日記』と『更級日記』の関係と言えば、『紫式部日記』の、右の箇所後半の贈答の部分、あるいは、

明けたてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世をすぐしつ

の歌と、『更級日記』、

御前に臥して聞けば、池の鳥どもの、夜もすがら声々羽ぶき騒ぐ音のするに、目も覚めて、

わがごとぞ水の浮寝に明かしつつ上毛の霜を払ひ侘ぶなる

とひとりごちたるを、かたはらに臥し給へる人聞きつけて、

まして思へ水の仮寝のほどだにぞ上毛の霜を払ひ侘びける

の贈答などが類似として指摘される程度に留まっていたが、前掲のそれに先立つ箇所における類似などを追加す

ることによって、『紫式部日記』の『更級日記』への影響関係を認定してもよいように思う。

そう言えば、ここの『更級日記』の「御前に臥して聞けば」という書き出しなどは、『紫式部日記』によく見られる、

渡殿の戸口の局に見出せば、

その夜さり、御前に参りたれば、

細殿の三の口に臥したれば、

などの書き出しの呼吸を引き継いだものであったのかも知れない。

『更級日記』に影響を与えた先行の作品は、『源氏物語』だけにとどまらない。その作者の日記たる『紫式部日記』も、『更級日記』の範とするものであった。自ら日記をものするにあたって、あこがれる『源氏物語』の作者に、日記の作品があつたとすれば、それを参照しない方が不自然というものであろう。『更級日記』が『紫式部日記』を、その先蹤として仰ぐのは、当然すぎるほど当然なことであつた。

したがって、一見『紫式部日記』とは無関係に見える、次のような一節にも、見方によっては『紫式部日記』の影響を認めることが出来る。

まづ一夜参る。菊の濃く薄き八つばかりに、濃き搔練を上に着たり。さこそ物語にのみ心を入れて、それを見るより他に、行き通ふ類親族などだにことになく、古代の親どものかげばかりにて、月をも花をも見るより他のことはなきならひに、立ち出づるほどのこち、あれかにもあらず、うつつともおぼえて、暁にはまかでぬ。

初めて出仕した記念すべき日の思いが綴られているが、『紫式部日記』にも初出仕の日を回想した記事が見える。しはすの二十九日に参る。初めて参りしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身の程やおぼゆ。

「あれかにもあらず、うつつともおぼえで」と、「夢路にまどはれしかな」と、双方に同じような内容が見られる。

だが、一見同内容とは言え、この箇所に関する限り、二つの作品の影響関係を考え得るほどの確証は乏しく、『更級日記』が『紫式部日記』を参照していたと言うには、やはり躊躇せざるを得ない。

しかし、ここにさらに『枕草子』から、「宮に初めて参りたる頃」の段を対照するならば、『更級日記』が『紫式部日記』初出仕回想の記事を参照していたであろう蓋然性は俄かに高まるように思われる。

宮に初めて参りたる頃、ものの恥かしきことの数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々参りて、三尺の御几帳の後にさぶらふに、絵など取り出でて見させ給ふを、手にてもえさし出づまじうわりなし。(中略) 暁はとく下りなんと急がる。(中略) あれにもあらぬ心地すれど、参るぞいと苦しき。(中略) 物語にいみじう口にまかせて言ひたるに違はざめりとおぼゆ。宮は、白き御衣どもに紅の唐綾をぞ上に奉りたる。御髪のかからせ給へるなど、絵に描きたるをこそかかることは見しに、うつつにはまだ知らぬを、夢の心地とする。(中略) さし向ひ聞えたる心地、うつつともおぼえず。

(一八四段)

『更級日記』「あれかにもあらず、うつつともおぼえで」に対して、『枕草子』「あれにもあらぬ心地」、「うつつともおぼえず」(傍線部)の対応、あるいは物語と宮仕えの対置、「暁」の退出への言及の類似(波線部)など、こ

の箇所『更級日記』が『枕草子』「宮に初めて参りたる頃」の段に基づくことは歴然たるものがある。⁽⁷⁾

ここでさらに注目すべきは、『紫式部日記』「夢地にまどはれしかな」にきわめて近い表現が『枕草子』に見出される点である。すなわち「夢の心地ぞする」(傍線部)。

『枕草子』、『紫式部日記』、『更級日記』三つの女房日記は、言い合わせた如くに、自らの初出仕について記し、ともに茫然自失の状況を語るのである。

それは一つの文学史的な類型であつたかも知れない。平安朝の女性にとって、宮仕えに出ることは、確かに画期的な出来事であつたであらうし、それは是非とも日記に記し留められるべき話題であつたのであらう。そして、その時の当惑を語ることは、結果として自らを卑下し、⁽⁸⁾ 主家を讃えることになる点において、女房日記には、不可決の要件でもあつたのであらう。事實はむしろ問題ではない。事実というより、そういう話題を記すことが女房日記のあるべき姿であつたのではないか。

だとするならば、孝標女は、『枕草子』以来のこうした文学的な伝統を踏まえて初出仕の記事を記したものと考えられる。そこに『紫式部日記』の閑却されるはずもない。だから、はつきりと表面に現れてはいなくても、孝標女が、『紫式部日記』を意識してこの記事を書いたことは、十分想定されて来る。

恐らく、孝標女にとって、清少納言の『枕草子』、紫式部の『紫式部日記』は、女房日記の大いなる先蹤であつたのであらう。⁽⁹⁾ そういう伝統を承けて、その文学史に新たに参画しようとする意図のもとに、『更級日記』は書かれたものではなかつたらうか。

そのような見地に立つて見るならば、本稿前章において考察した、春秋優劣の論の話題などにも、また新たな

文学史的な意義を見出すことが可能になってくる。

そもそも、平安朝においては、しかるべき公達を相手に、あのような会話を交すことは、宮仕えの女房にとって、一つの理想的な姿でもあったらしい。『枕草子』を見れば、そのような経験を清少納言が誇らしげに記し留めた例をいくつも見出すことが出来る。

そのような体験は、紫式部にも当然あって、それもその日記に記し留められている。例えば、

恐ろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、事果つるままに、宰相の君に言ひ合わせて、隠れなむとするに、東面に殿の君達宰相の中將など入りて騒がしければ、二人御帳の後に居隠れたるを、取り払はせ給ひて二人ながら捉へ据ゑさせ給へり。「和歌ひとつつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。いとほしく恐ろしければ聞こゆ。

いかにいかが数へやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば

「あはれ、仕うまつれつれるかな」とふたたびばかり誦せさせ給ひて、

道長の和歌の無理強いに、紫式部が即座に答えたことが記されている。「言ひ合わせて、隠れなむとする」など、『更級日記』の「逃げ入りて局なる人々呼び上げなどせむ」と同じような設定であった。

あるいは、

しめやかなる夕暮に、宰相の君と二人、物語してゐたるに、殿の三位の君、簾のつま引き上げてゐ給ふ。年のほどよりはいとおとなしく、心にくき様して、「人はなほ心ばへこそ難きものなめれ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、幼しと人のあなづり聞ゆるこそあしけれど、恥づかしげに見ゆ。うちとけぬ

ほどにて、「多かる野べに」とうち誦んじて立ち給ひにし様こそ、物語にほめたるをとこのこちし待りしか。「殿の三位の君」とは、藤原頼道、道長の嫡子、歴とした上達部であるが、「宰相の君と二人、物語してゐたるに」という状況といい、「世の物語しめじめとして」、「うちとけぬほどにて」という公達のあり様といい、『更級日記』に記された資通との逸話によく類似している。あるいは『更級日記』は、このような『紫式部日記』の記事に倣うところもあつたのかも知れない。

いずれにしても、『枕草子』、『紫式部日記』等、女房の日記は、上級貴族を相手に相応の応対をなしたことを、競い合うように書き留めている。しかるべき貴族に一人前に相手にされることは、光榮なことであつたのであるうし、その貴族と十分渡り合えたことは、女房としては誇るべき手柄話にもなつたのであろう。それを記すことは女房日記としてのあるべき体裁の一であつたと言ってもよい。

孝標女も、自分も先輩の女房達に伍して、宮廷での勤めを十分に果たし得る女房になり得たことを、誇りとして、この記事を綴つたのではあるまいか。『更級日記』には、文章を以つて出仕した、清少納言が『枕草子』を遺し、紫式部が『紫式部日記』を遺した、その同じ列に連なるものとして、綴られた面があるのではないか。

だとすれば、話題の選び方、その記し方など、そこには自ら、女房としての、あるいは女房の日記としてのあるべき姿、というようものが制約的に作用したことであらう。そうなければますます、『更級日記』は、事実の正確な記録からは遠いものになるはずである。女房日記の伝統を背負えば背負うほど、宮廷女房としての自覚を持てば持つほど、『更級日記』に美化や脚色の交る可能性はさらに大きかつたと言わざるを得ない。

『源氏物語』の影響といい、女房日記に類する記事といい、これらは『更級日記』の表現の本質にかかわる問

題を呈示している。表現の多くを先行の作品に依存して、自立した表現を自らは必ずしも持たなかったということは、他ならぬ自らの事蹟を記すべき、日記という作品にとつては、確かに大きな問題であつたと言わなくてはならない。自らの人生を記す日記に、先行作品の影響による美化や脚色があるとすれば、それは結局のところ、その人生自体を、日記を綴ることによって美化し、脚色していることにつながるからである。

四

『源氏物語』、『紫式部日記』と並んで、『枕草子』の『更級日記』に与えた影響にも軽視出来ないものがある。次の一節などは、『枕草子』の一段だと言っても、通用しかねないほど『枕草子』に類似している。

春頃、鞍馬に籠りたり。山際霞みわたり、のどやかなるに、山の方よりわづかに野老など掘りて来るものをかし。出づる道は花もみな散りはてにければ、何ともなきを、十月ばかりに詣づるに、道のほど、山のけしき、この頃は、いみじうまさるものなりける。山の端、錦をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうに湧きかへるなど、いづれにもすぐれたり。

「春頃」と「十月ばかり」の対比、「をかし」「すぐれたり」などの筆致など、『枕草子』を髣髴とさせる印象がある。特に「山の方よりわづかに野老など掘りて来るものをかし」などは、『源氏物語』であれば、「そのわたりの山に掘れる野老などの、山里につけてあはれなれば（横笛）」などと書いたところで、いかにこのあたりの『更級日記』の書き方が『枕草子』に近いものになっているか、はつきりと示すものであろう。冒頭「春頃、鞍馬に

籠りたり。山際霞みわたり、のどやかなるに」などは、『枕草子』初段の「春は曙。やうやうしろくなりゆく山際、少し明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」を連想させるし、あるいは、「十月ばかりに詣づるに」などは、日時に細心であるべき日記の表現というよりは、

五月ばかり、月もなう暗きに、

(一三七段)

八月ばかりに、

(一九〇段)

五月ばかりなどに山里に歩く

(二三三段)

などの、『枕草子』随想的章段に特徴的に見られる表現に通うところが大きい。

いずれも『枕草子』の表現を一つの典型として、『更級日記』がその表現に倣ったものと見てよいであろう。⁽¹⁰⁾

分けても、『更級日記』の中でも、印象鮮烈な表現、「たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうに湧きかへる」。これにも、実は『枕草子』に先蹤が見出される。⁽¹¹⁾

月のいと明かきに、川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの割れたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。⁽¹²⁾

(一三二段)

一見、『更級日記』の表現は、感覚鮮やかで独創的な表現に見えるけれど、しかしそれも実は『枕草子』に学んだものであつたらしい。⁽¹²⁾

少なくともこのあたりの『更級日記』の書き方に見る限り、『更級日記』はその感性の多くを『枕草子』に負っている。自分の眼で見、感じたことを、自分の表現で表現したというよりも、このあたりの『更級日記』は、既製の感性でものを見、既製の表現でものを言うことを選んでいと言わざるを得ないであらう。

自らの作品の位置を、文学史のうえに自覚し、それに立脚して作品を作ることは、しかし反面、このようにその制約を受けることでもある。『更級日記』の場合、その度合は意外に大きく、作者の感性の水準にまで、影響を及ぼすものであったらしい。

次の一節などは、『更級日記』の感性が、まったく『枕草子』の圧倒的な影響下にあることを示している。⁽¹³⁾

歸りて、夕日けさやかにさしたるに、都の方も残りなく見やらるるに、この雪に濁る人は、京に帰るとて心苦しげに思ひて、またつとめて

山の端に入日の影は入りはてて心細くぞながめやられし

念仏する僧の暁に額づく音の尊とく聞こゆれば、戸を押しあけたれば、ほのぼのと明けゆく山際、こぐらき梢ども霧りわたりて、花紅葉の盛りよりも、何となく繁りわたれる空のけしき曇らはしく、をかしきに、ほどとぎすさへ、いと近き梢にあまたたび鳴いたり。

『枕草子』初段がなければ、右のような表現は成り立たなかつたであろう(傍線部)。前引、『枕草子』初段春の一節に続く、秋の一節を対照のために掲げておく。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、(中略)日入りはてて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

ただ、次の一節などは、『枕草子』を意識しつつも、『枕草子』に対して一矢報いていると思われる点で、『更級日記』の健闘を称えるべき所かも知れない。

また初瀬に詣つれば、初めにこよなく頼もし、ところどころに設けなどして、行きもやらす。(中略)野中

にかりそめに庵を作りて据ゑたれば、人はただ野にゐて夜を明かす。草の上に行簾などをうち敷きて、上に筵を敷きて、いとはかなくて夜を明かす。頭もしとどに露おく。暁がたの月、いといみじく澄みわたりて、世に知らずをかし。

ゆくへなき旅の空にも遅れぬは都にて見し有明の月

『枕草子』にもこれによく似た状況の段がある。

九月二十日あまりのほど、長谷に詣でて、いとはかなき家に泊りたりしに、いと苦しくて、ただ寝に寝入りぬ。夜更けて、月の窓より洩りたりしに、人の臥したりしどもが衣の上に、しろうてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおぼえしか。さやうなる折ぞ、人歌詠むかし。

(二三八段)

ともに、初瀬詣の段、旅の仮寝に月光の美しさを見出す点で、双方よく似ているけれども、『更級日記』が、最後に一首の歌を載せているのは、『枕草子』の「さやうなる折ぞ、人歌詠むかし」⁽¹⁴⁾にはるかに応じたものであらう。孝標女の得意は、さぞかしのことであったと思われる。

だが、右の一節には別の意味で看過出来ないところがある。それは傍線の箇所、「ところどころに設けなどして、行きもやらず」あたりに、実は『蜻蛉日記』との類似が指摘されている点である。

『蜻蛉日記』作者、道綱母も何度か初瀬に詣で、その様が日記に書き留められているが、その中に、傍線の箇所によく似た叙述があった。

ここかしこあるじしつづつ留むれば、もの騒がしうて過ぎ行く。

そこよりはじめて、あるじする所、行きもやらずあり。

(上巻、安和元年九月)

(中巻、天禄二年七月)

同じ初瀬詣の、同じような叙述。この類似は、確かに偶然のものではないのかも知れない。『更級日記』定家自筆本の識語に言われる如く、孝標女は、「傳の殿の母上の姪」、すなわち『蜻蛉日記』作者の姪であつた。『更級日記』が『蜻蛉日記』に大いに学んだであろうことは、十分に考えられることである。⁽¹⁵⁾

『枕草子』の初瀬詣、『蜻蛉日記』の初瀬詣の記事に、『更級日記』のそれを加えるならば、そこにも女房日記の一つの類型をたどることが出来るように思う。この先行の二作品の記事を襲つて、『更級日記』のこの記事も書かれたのではなからうか。

このように考えるならば、『更級日記』にもう一箇所描かれる、初瀬詣の記事にも同様な背景が考えられなければならない。

そのかへる年の十月二十五日、大嘗会の御禊とのしるに、初瀬の精進始めて、その日京を出づるに、さるべき人々、「一代に一度の見物にて、田舎世界の人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふり出でて行かむも、いとものぐるほしく、流れての物語ともなりぬべきことなり」など、はらからなる人は言ひ腹立てど、児どもの親なる人は、「いかにもいかに、心にこそあらめ」とて、言ふにしがひて出だし立つる心ばへもあはれなり。

永承元（一〇四六）年、折からの後冷泉天皇の「大嘗会」の騒ぎにも拘らず、孝標女は、それには目もくれずに初瀬参詣のために京を立つた。

恐らく、この記事にも、『蜻蛉日記』参看の反映が考えられる。まず冒頭傍線の箇所、よく似た表現は『蜻蛉日記』にも見出すことが出来る。⁽¹⁶⁾

九月も同じさまにて過ぐすめり。世には、大嘗会の御禊とて騒ぐ。

十一月になりて、大嘗会とぞのしるべき。

(中巻、天禄元年)

そして、さらに『蜻蛉日記』との関係で注目すべきなのは、孝標女が特筆する、「大嘗会の御禊」を無視しての出発の点。

『蜻蛉日記』安和元年の初瀬参詣は、次のような状況で行われた。

かくて、年頃願あるを、いかで初瀬にと思ひ立つを、立たむ月にと思ふを、さすがに心にしまかせねば、からうじて九月に思ひ立つ。「立たむ月には大嘗会の御禊、これより女御代出で立たるべし。これ過ぐして、もろともにやは」とあれど、わが方のことにしあらねば、忍びて思ひ立ちて、

作者道綱母は、初瀬詣を思い立ったが、夫、兼家は、自家から翌月の「大嘗会の御禊」に女御代が立つので、延期を申し入れた。しかし、道綱母は、それを振り捨てて初瀬へと旅立ったのである。

恐らく、道綱母には、兼家の嫡妻、時姫所生の女御代への反発の気持ちもあったのであろうが、「大嘗会の御禊」という国家的行事を「わが方のことにしあらねば」と、さておいて、果断に初瀬へ旅立った道綱の母の信念は、孝標女の、心強い先例であったかも知れない。孝標女が、『蜻蛉日記』を読んでいたという前提に立って『更級日記』を眺めるとき、孝標女に一途な行動をとらせた一つの契機は、『蜻蛉日記』に記された、道綱母の行動であったように思われてくる。

もし、そのような推測が許されたとしたら、『更級日記』の孝標女は、その感性のみならず、考え方や行動の水準においても、先行作品から少なからぬ影響を受けていたことになる。

道綱母は、『蜻蛉日記』について、その序文で、「天下の人の品高きやと、問はむためしにもせよかし」と述べていたが、まさにその意味で『蜻蛉日記』は『更級日記』にとつては、「ためし」の位置を占めるものであった。そして、もし「更級日記」というこの日記の題号が、作中の、

月も出でで闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ

の歌が基づいた、

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

(『古今和歌集』)

の古歌による、恐らくは卑下を含んだ命名であつたとするならば、それは同じく、

世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそありけれ

(『古今和歌六帖』)

などの歌句によつて、「なほものはかなきを思へば、あるかなきかのこちする。かげろふの日記と言ふべし」と作中にその由来が述べられた、『蜻蛉日記』の命名に倣つたものではなかつたか。⁽¹⁷⁾

今、わずかの例を検討したに留まるけれど、『更級日記』が、日記文学史の流れを承けたところに成立した作品であることは、否定し難いように思う。『更級日記』は、その文学史に深く根を降ろし、その豊かな成果を十分吸い上げたところに開花した作品なのであつた。より仔細な検証が試みられるならば、『更級日記』が、いかに豊かな文学史的土壤に根ざした作品であつたか、さらに具体的にたどり得ることになるであらう。

はるか時代は下って、『徒然草』。その十二段は、友人を論じて、「心の友」に及ぶ。

同じ心ならむ人としめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなく言ひ慰まれむこそうれしかるべきに、⁽¹⁸⁾

その書き出しは、前引『更級日記』の一節に似たところがある。

同じ心に、かやうに言ひ交し、世の中の憂きも辛きもをかしきも、かたみに言ひ語らふ人、

『徒然草』は、王朝の文化に大きなあこがれを抱いて、その文学の影響は『徒然草』の文章にも著しい。「言ひ続ければ、皆源氏の物語、枕草子などにこと古りにたれど、同じことは今さらに言はじともあらず（十九段）。『源氏物語』、『枕草子』については文中に言及があつたが、この段の文章について見ればそれに、『更級日記』を加えて考えてみる事が出来るかも知れない。⁽¹⁹⁾

もしそれが可能であるとすれば、『更級日記』の孝標女は、『枕草子』の清少納言や『源氏物語』の紫式部などに伍して、『徒然草』に影響を及ぼしたことになる。先輩の女房達によって、営々と築かれてきた文学史に参画しようという、孝標女の意図は、見事に実現を見たのである。ましてそれが、日本文学史上屈指の名随筆『徒然草』の認定によるものであるとするならば、地下の孝標女本来の面目、その満足のほどが偲ばれる。

『更級日記』をも含み込んで、日記の文学史は豊かな蓄積を貯え、確固たる歴史を刻んで後代へ受け継がれてゆく。

『徒然草』に先立つこと半世紀、飛鳥井雅有は、その日記『嵯峨のかよひ路』を綴るに当って、本邦日記文学史を回顧して、次のように述べている。

そこ（藤原為家）より、『土左の日記』、『紫式部日記』、『更級の日記』、『蜻蛉の日記』などをおこせたり。まことに女の事なれば、虫損（虫損）んなり。男も仮名に書くらん事、この国のことわざなれば故あり。『伊勢物語』も、秋津島の文字にてぞあるべしなどいふ。⁽²⁰⁾

最早、雅有にとつて、日記を綴るということは、歴史から独立した、純粹に個人的な営為では有り得なくなっている。それは、『土佐日記』以来、文学史と言えるほどのものを醸成しつつあった、日記文学の伝統の、自らの流れの上にあるものとして、自覚されたのである。

そして恐らく、それと同じような状況は孝標女の『更級日記』においても考えられる必要があるだろう。⁽²¹⁾『更級日記』の前に、『蜻蛉日記』あり、『枕草子』あり、『紫式部日記』のある以上、そして恐らく『更級日記』がその影響の下にある以上、『更級日記』も日常身近の事実をありのままに記すという、単なる日記では有り得なかつたはずである。それは、道綱母が『蜻蛉日記』を遺し、清少納言が『枕草子』を遺し、紫式部が『紫式部日記』を遺した、営為に続くものとしての、文学史的な意義を担うべきものであった。

そうして、『更級日記』にとつての文学史とは日記の文学史だけに留まらない。それは、『源氏物語』を筆頭とする、物語文学の歴史をも、当然のことながら包含する。

源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、帰るここのうれしさぞいみじきや。

幼少時から愛読した、物語。それも『更級日記』を生んだ豊かな文学的土壌であつた。いかに『更級日記』が物語的な潤色を含むものであつたか、『源氏物語』の事例にそくして、すでに述べた如くである。『更級日記』にと

って、物語とは、しばしば先行の日記と同じような、倣うべき範型でもあった。

『更級日記』は、

昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめて、夜昼思ひて行ひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。

などと、物語への幻滅を語り、物語に熱中したことへの後悔を繰り返している。とは言え、それとは裏腹に、『更級日記』の書き方自体は、物語からの訣別を果し得てはいない。いないばかりか、きわめて濃厚に物語的な潤色の跡を留めているようにさえ思われる。

そういう点を重視するならば、『更級日記』は、日記と言うよりも、一篇の物語であったと言った方が、その文章にはふさわしかったかも知れない。『更級日記』は孝標女の人生を素材とはしつつも、その叙述においてそれは、理想的な方向に微妙にずらされている。再三の悔悟にも拘らず、『更級日記』に見る限り、孝標女は、その本質において、一篇の物語を生きたのであり、『更級日記』は、その、自らする証しであった。

日記とは言っても、『更級日記』の結構それ自体は、むしろ物語の骨格を示している。出生に始まり、その一生に及ぶという『更級日記』の構成は、そのまま、一代記、物語の主人公のものであった。

「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方」での生い立ちに始まり、

繁りゆく蓬が露にそぼちつつ人に訪はれぬ音をのみぞ泣く

という、老残の歌に終わる、『更級日記』の構成は、主人公の元服に始まり、辞世、

つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

に終わる、「在中将」『伊勢物語』⁽²²⁾や、主人公の出生、元服を語る桐壺に始まり、

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる

の一首ののち、雲隠に終わる『源氏物語』正篇など、物語のそれと通うものになっている。こうした点から言っても、『更級日記』は、孝標女自らを主人公に据えた、一篇の物語であつた、と言ひ得る作品でもあつた。

『更級日記』以外の日記が、殆ど人生の断片的な記録の位置に留まる中で、ひとり『更級日記』が、作者の全生涯を叙述の対象としていることは、『更級日記』の独自性として認識を新たにすべきことであらう。

平安朝の日記の文学史の流れを承けることにおいて、始めて成立し得た『更級日記』ではあつたが、事この点においては、結果として『更級日記』は、その文学史を凌駕することになった。『更級日記』は、先行の日記の諸作に多くを負いつつも、史上初めて一貫した、自叙伝の形を備えることにおいて、日記文学史上の名譽を担うことになったと思われる。

恐らくこれは、孝標女が生来あこがれつづけた、物語なるものとの出会いによつてもたらされたものである。しかし、『更級日記』が、その実質においても、十全な自叙伝たり得たかどうか。それはなお、断定をはばかる。むしろ来由が来由だけに、それははなはだ心許ないと評するのが、あるいは至当というべきかも知れない。

注

- (1) 諸作品の引用は便宜通行本によつた。『枕草子』は能因本による章段を示した。
(2) 『和泉式部日記』の冒頭「夢よりもはかなき世の中を」に対して、

(3)

夢よりもはかなきものは夏の夜の暁がたの別れなりけり
 夢よりもはかなきものはかげろふのほのかに見えしかげにぞありける
 (『後撰和歌集』夏、壬生忠岑)
 などの影響が考えられているが、歌句の襲用にとどまるようである。
 (『拾遺和歌集』、恋三読み人しらず)

このあたりの春秋の情景の叙述には、『源氏物語』の以下の記事が踏まえていると思われる。

臥待の月はつかにさし出でたる、「心もとなしや、春の朧月夜よ。秋のあはれはた、かうやうなるものの音に、虫の声縫り合はせたる、ただならずこよなく響き添ふこちすかし」とのたまへば、大将の君「秋の夜の隈なき月には、よろづのものとどこほりなきに、琴笛の音も、あきらかに澄めるこちしはべれど、なほことさらに作り合はせたるやうなる空のけしき、花の露も、いろいろ目うつろひ心散りて、限りこそはべれ。春の空のたどたどしき霞の間より、朧なる月影に静かに吹き合はせたるやうにはいかでか。笛の音なども、艶に澄み登り果てずなむ。女は春をあはれぶと、古き人の言ひ置きはべりける、げにさなむはべりける。なつかしくものとのほることは、春の夕暮こそことにはべりけれ」
 (若葉下)

さらに具体的には、

このころの朧月夜に、……ほのかに掻き鳴らし給ふ、をかしう聞こゆ。……月のをかしきほどに雲隠れたる道のほど、笛吹き合はせて大殿におはしぬ。……中務の君、わざと琵琶は弾けど、
 (末摘花)

弾きもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手の限りして、をりに合ひたる調子吹き立つるほど、川風吹き合はせておもしろきに、月高くさし上り、よろづのこと澄める夜のやや更くるほど、
 (松風)

「十月」になるが、

神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、……風にきはへる紅葉の乱れなど、……懷なりける笛取り出て吹きならし、……よく鳴る和琴を調べととのへたりける、うるはしく掻き合はせたりしほど、けしうはあらずかし。

律の調べは、女のものやはらかに掻き鳴らして、簾のうちより聞こえたるも、今めきたるものの声なれば、清く澄める月にをりつきなからず。
 (帯木)

などを念頭に置くと思われる。

(4)

『源氏物語』には、

「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の月に雪の光り合ひたる空こそ、あやしう、色なきものの身にしてみて」

(朝顔)

とある。

- (5) 『紫式部集』には、次の贈答がある。

筑紫へ行く人の娘の

西の海を思ひやりつつ月見ればただに泣かるる頃にもあるかな

返し

西へ行く月のたよりに玉づさのかきたえめやは雲の通ひ路

- (6) あるいは、『更級日記』、

年は暮れよは明け方の月影の袖にうつれるほどぞはかなき

と、『紫式部日記』、

年は暮れわがよふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな

の類似など。

なお、『更級日記』の右の歌の後半は、『源氏物語』須磨の巻、

女君の濃き御衣にうつりて、げに濡るる顔なれば、

月影の宿れる袖はせばくともとても見ばやあかぬ光を

の一節に基づいている。

- (7) 本章冒頭に引用した『更級日記』の「うらうらとのどかなる宮にて」に対して、『枕草子』には、「うらうらとのどかに照りたる」(四段)、「うらうらと日のけしきのどかにて」(八三段)などがある。

- (8) 宮仕えに馴染まない自らを、卑下して綴ることにおいても、『更級日記』は『紫式部日記』と軌を一にしている。

例えば、

『更級日記』、

われはいと若人にあるべきにもあらず、また大人にせらるべきおぼえもなく、時々まらうとにさし放たれて、

すずろなるやうなれど、(中略) つれづれなるさんべき人と物語などして、めでたきことも、をかしくおもしろきををりも、わが身はかやうに立ち交り、いたく人にも見知られむにも、はばかりあんべければ、
に對して、『紫式部日記』には、

思ふことの少しもなのめなる身ならましければ、すきずきしくもてなし、若やぎて、常なき世をも過ぐしてまし。めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひく方のみ強くて、もの憂く、思はずに嘆かしきことのまさるぞ、いと苦しき。

年頃つれづれになかめ明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その時來にけりとばかり思ひわきつつ、いかにやいかにとばかり、行く末の心細さはやるかたなきものから、はかなき物語などにつけてうち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書き交し、少しけどほきたよりどもを、たづねても言ひけるを、ただこれをさまざまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをばなくさめつつ、世にあるべき人数とは思はずながら、さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひ知るかたばかりのがれたりしを、さも残せることなく思ひ知る身の憂さかな。

などとなる。

- (9) 『枕草子』は、一般的には隨筆とされるが、本稿では、その日記としての性格を重視する。逆に、『更級日記』にも、一三年、四五年隔てたることを、次第もなく書き続ければ、やがて続き立ちたる修行者めきたれど、さにはあらず、年月隔たれることなり。

など、隨筆に通ずる筆致を見出すことが出来る。

- (10) 孝標女が仕えた祐子内親王は、中宮定子の曾孫に当る。

- (11) 『枕草子』三〇二段にも、「水晶の瀧」という表現が見られる。

- (12) にしとみといふ所の山、絵よくかきたらむ屏風を立て並べたらむやうなり。

大和撫子の、濃く薄く錦を引けるやうになむ咲きたる。

さまことなる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、

など、一見『更級日記』に個性的に見える表現にも、それぞれ、

羅帷卷却翠屏明

〔和漢朗詠集〕山、後中書王

夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見え紛ふ庭の面

〔源氏物語〕藤裏葉

遠山を眺めやれば、紺青を塗りたるとかやいふやうにて

〔蜻蛉日記〕

など、先行の作品に類例を見出すことが出来る。

(13)

卯月つごもりがたに、初瀬に詣でて、淀の渡りといふものをせしかば、舟に車掻き据ゑて、菖蒲、菰などの末の短く見えしをとらせたれば、いと長かりけり。

〔枕草子〕一一四段

卯月つごもりがた、さるべきゆゑありて東山なる所へうつろふ。道の程、田の苗代水まかせたるも、植ゑたるも、なにとなく青みをかしう見えわたりたる。

〔更級日記〕

八月つごもり、太秦に詣つとて見れば、

〔枕草子〕一二七段

八月ばかりに、太秦に籠るに、

〔更級日記〕

穂に出でたる田を人いと多く見騒ぐは、稲刈るなりけり。早苗とりしかいつのまに、まことに先つ頃、賀茂へ詣づとて見しが、あはれにもなりにけるかな。

〔枕草子〕一二七段

京に帰り出づるに、わたりし時は、水ばかり見えし田どもも、皆刈り果ててけり。

〔更級日記〕

など、『枕草子』と『更級日記』に共通する、発想や表現や話題は決して少なくない。

(14)

『更級日記』

皆人はかりそめの飯屋などいへど、風すさまじく、引きわたしたるに、これは、をとこなども添はねば、いと手放ちに、あらあらしげにて、苦といふものを一重うち葺きたれば、月残りなくさし入りたるに、紅の衣上に着て、うちなやみて臥したる月かげ、さやうの人にはこよなくすぎて、いと白く清げにて、めづらしと思ひて掻き撫でつつうち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、

の条なども、『枕草子』一二八段に似る。

(15)

『更級日記』

まいて、その日は立ち騒ぎて、時なりぬれば、今はとて簾を引き上げて、うち見合はせて涙をはろほると落とし、やがて出でぬるを見送るこち、目もくれまどひて、やがて伏されぬるに、とまるをのこの送りして帰るに、

懷紙に、

思ふこと心に叶ふ身なりせば秋の別れを深く知らまし

とばかり書かれたるをも、え見やられず。

の一節と、『蜻蛉日記』、

今はとて皆出で立つ日になりて、行く人もせきあへぬまであり。とまる人、はたまいていふかたなく悲しきに、時違ひぬるを言ふまでも、え出でやらず。かたへなる硯に、文を押し卷きうち入れて、またほろほろと、うち泣きて出でぬ。しばしは見む心もなし。見出で果てぬるに、ためらひて、寄りて何事ぞと見れば、

君をのみ頼む旅なる心には行く末遠く思ほゆるかな

とぞある。

(上巻、天曆八年十月)

の一節の類似などが指摘されている。

(16) ただし、『栄花物語』などにも、

今年こそは、御禊、大嘗会などののしるめれ。

かくて十月になりぬれば、御禊、大嘗会とて、世ののしりたり。

(月の宴
様々のよろこび)

などとなる。

(17) 孝標女には、次のような詠歌がある。

何事もわれ嘆くらむかげろふのはめくよりも常ならぬ世に

(『続古今和歌集』哀傷)

(18) 「同心ならむ人」とする本もある。いずれにしても、『徒然草』のこの箇所に関しては、漢語「同心」との関連が考えられなければならない。

(19) 『徒然草』序段、

つれづれなるままに、日暮らし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書き付くれば、

などは、『更級日記』の一節、

そこはかとなきことを思ひ続けるを役にて、

二三年、四五年隔てたることを、次第もなく書き続けければ、

などに通うところがある。

- (20) ここに、他の日記諸作と並んで、『伊勢物語』が挙げられているのは、『伊勢物語』がまさに、「在五中将の日記」(『狭衣物語』と理解されていたことと符合する。

- (21) 『更級日記』の、

夕霧たちわたりていみじうをかしければ、あさいなどもせず。

もろこしが原に、大和撫子しも咲きけむこそ。

その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。片つ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月

いみじうあかきに、

などは、『土左日記』の、

舟路なれど、馬のはなむけす。

黒鳥のもとに白き波を寄す。

くろさきの松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にい

まひと色ぞ足らぬ。

などに、類似するところがある。ともに旅の記を持つことを含めて、『土左日記』と『更級日記』の関連の問題は、なお検討を要する課題である。

- (22) 『更級日記』「あすだ川」の条に、「中将の集」と「在中将」に言及があるのは、この日記が、その前半に紀行の部分を持つことの先蹤が、『伊勢物語』(「在五中将の日記」)の、東下りの段にあったことを思わせるものである。